

# ラボの世界

THE WORLD OF LABO

## TOPIC

ラボ国際交流 2022  
地平線白書

P4～7

- 01 10代とともに「ネコ好きからヒョウ博士へ」
- 04 地平線白書 ラボ国際交流 2022
- 08 教師のためのことばセミナー  
「ことばって、こう考えてみたらめっちゃおもしろいなあ、先生」
- 09 Go Ahead! 人との出会いから学びにつける



ななめから世界を見て  
みるのもいいね！



## 10代とともに

# 仲澤伸子

Nobuko Nakazawa

岐阜県出身。3歳から高3までラボ会員として活動。中1でラボ国際交流に参加し、カナダ・オンタリオ州でホームステイをしました。そのホームステイ先で飼っていたネコが野生のリスを自分でしとめて食べているのを目撃するという衝撃的な体験から、「食う・食われる」という関係に興味をもたれたとのこと。京都大学在学中にアメリカ・ラトガース大学主催で行なわれた1か月にわたるケニアでのフィールドスクールプログラムに参加し、アフリカでの研究活動に関わり始めました。京都大学大学院進学後はタンザニア・マハレ山塊国立公園でアフリカヒョウの研究をスタート。捕食者としてのアフリカヒョウの活動リズム、食性などについての研究をされています。2020年に博士号(生物学)を取得。現在は日本学術振興会特別研究員(PD)かつ椋山女学園大学人間関係学部研究員です。



## ネコ好きから ヒョウ博士へ



### ネコが好きで、本が好きなお子でもでした

子どもの頃からとにかく動物が好きで、動物関連のテレビ番組を見てその情報を書き溜めたり、新聞の動物欄を切り抜いて集めていました。なかでもネコが大好きで、学校から帰る途中に野良ネコを探して、世話をしたり日暮れまでじっと観察したりしていました。

野良ネコだけでなく、家で飼っていたイヌなど身近な動物とともにいることが好きだったことから、テレビで見てもあこがれたアフリカの大型ネコ科動物の研究をしたいと思っていました。とはいえずで遊ぶのはあまり好きではなく、起きているあいだはずっと本を読んでいた。何日も出かけるラボキャンプなどはホームシックになるので、小学校高学年くらいまで苦手でした。

大好きだった動物の「食う・食われる」の関係を早くから意識していたという仲澤さん。研究対象であるヒョウと古代の人間は同じエリアで生活していました。人間も「食う」存在ですが、同時に「食われる」存在でした。子ども時代から好きだった動物。とくにネコ、そしてネコ科の動物であるライオン、ヒョウ……興味・関心はつながりました。「家をはなれて過ごすのはホームシックになるからいやだった」という仲澤さんがなぜ、タンザニアでのタフな研究活動の道に進んだのか、このお話をきけば、わかるかも知れません。

### 中1でラボ国際交流に参加

中1のときのホームステイでは、当時好きだった『赤毛のアン』の舞台であるカナダを希望したところ、行き先は運よくカナダのオンタリオ州東部の牧場に決まりました。出発前は、ホームシックになるのではないかと不安と、『赤毛のアン』の舞台の近く、それも牧場に行けるというワクワクが入り混じっていたように記憶しています。

ホームステイ先でははじめての牧場生活。衝撃的だったのは、飼猫と飼犬が人に餌をもらうのではなく、山の中で自分で狩りをして食べていた姿です。飼われていたのかどうかさえわからないくらい人間の手を借りずに生きる姿は、生き生きと見えました。

ほかにもびっくりすることがたくさん。空の色が日本と違いましたし、すごい風雨で家が浸水してもホストが「プールだ!」と喜んでいました。商品の包装紙に英語とフランス語が書いてあったのもびっくりしました。

お父さんが御す馬車にも乗りました。近所に娯楽施設はなかったですが、ブランコ、トランポリン、湖での水泳、自転車、野イチゴつみ、料理、手遊びなど、はじめての経験をたくさんしておもしろかったですし、友だちもたくさんできました。スカンクやビーバー

などの野生動物も見ることができました。

中1ですから英語はそんなにわからなかったのですが、友だちとの会話のなかでわからないときはお互いに絵をかくて説明したり、辞書をつかったりしました。まったくホームシックにならなかったことと、英語がわからなくてもお互いに伝えたい気持ちがあればなんとかなるという発見は、自信を与えてくれました。

### どんな研究を?

タンザニアのマハレというところで、「森林に生息するアフリカヒョウを中心とした『食う・食われる』の関係」をおもなテーマとして研究しています。

いままでの研究から、マハレのヒョウは霊長類をいちばん多く食べているのがわかりました。サバンナのヒョウはおもにウシ科動物を食べるので、霊長類を食べるのは森林のヒョウならではの特徴といえるかもしれません。木の上にいて、身軽で動きが速い霊長類をどうやって食べているのかは、今後も研究していきます。

ヒョウはネコ科動物のなかでイエネコに次ぐ広さの生息域をもっていて、世界中の寒いところにも暑いところにもいますが、野生で見つけることがひじょうにむずかしい動物で



## 10代とともに



す。とくに野生の森林のヒョウはまず見る  
ことができません。そこで、森の中に固定カメ  
ラを設置して、そこに映ったヒョウの体の模  
様から個体を識別して、何頭いるのかを調べ  
ます。いままでに7頭のヒョウを識別しまし  
た。おそらくもっとたくさんいると考えられ  
ます。



これは「パズー」と名付けたヒョウが私た  
ちのキャンプに来たときの写真です。まだ子  
どもで、私たち人間をこわがらないから姿を  
見せてくれたんですね。パズーは私たちが外  
に干していた洗濯物に興味をもったようで、  
靴やズボンなどを持っていきました。研究を  
始めて4年、はじめて見たヒョウでしたが、  
その模様や動きはとても美しく、心から感動  
しました。



### 日本からマハレまで 24 時間以上の旅

日本から飛行機でアラブ首長国連邦のドバ  
イまで10時間。そこから7時間飛んでタン

ザニアのダルエスサラームへ。さらに飛行機  
で2時間かけて国内を横断し、キゴマの空港  
に着きます。ここでキャンプのための食料な  
どを買い出しますが、値段はたとえばトマト  
5個で10円、マンゴーひとつ30円、パイ  
ナップひとつ100円、米1kgで100円と  
いう具合です。外国人だと高く請求されるの  
でしっかり交渉します。キゴマからポートな  
どで5時間以上かけて移動すると、マハレに  
到着します。



これは研究の拠点となるキャンプ地のリビ  
ングルームです。壁がないから動物がよく  
見えます。チンパンジーやアカオザル、ブ  
ッシュビッグなど、日々さまざまな動物がキャン  
プを訪れます。電気はソーラーパネルでま  
かないです。水はきれいな川がたくさんある  
ので、困らないですね。

### タンザニアの現地アシスタント

京都大学のチンパンジー研究チームは50  
年以上、マハレの人たちにアシスタントとし  
て現地調査の協力をしてもらっています。

アシスタントのいちばんの仕事はナタで藪  
を切り開いて調査のための道を作ったり、動  
物やその痕跡を探すことです。ほかにも、水  
を汲みにいってくれたり、ニワトリや魚をさ  
ばいて料理をしてくれます。洗濯、夜警（日  
本人はお金を持っていると思われるため）、食料買い出しなどもア  
シスタントがやってくれます。アシスタントの

ためのコックさんもいます。調査・研究は現  
地アシスタントがいないと成り立ちません。

ことばはスワヒリ語しか通じません。事  
前に日本で教えてもらいましたが、いざ現地  
に行くとなかなかことばが出てきませんでし  
た。そこで、アシスタントのひとと辞書をはさ  
んで毎日たくさん話したところ、2か月でか  
なり話せるようになりました。

私のスワヒリ語の語彙が少ないのもありま  
すが、アシスタントとケンカすることもあり  
ます。はじめのうちはとくに衝突が多かった  
です。遅刻してきたアシスタントが「仕事用  
の時計がないから時刻がわからずに遅れた。  
仕事用の時計がほしい」といったので「考え  
ておくれ」と伝えたら、「なんですぐ買って  
くれないんだ」と機嫌を悪くして、いっしょ  
に出かけたあと山に置き去りにされたことが  
あります。ほんとうに置き去りにしたのでは  
なくてこっそり見守ってくれていたのです  
が、私は憤慨しつつも手持ちのGPSを見な  
がらひとりでキャンプに帰り、ぶじ着いてか  
ら彼とケンカしました。

アシスタントの体調を気遣って「気にして  
るよ」と示さないと機嫌をそこねたりするこ  
となどもあってたいへんなのですが、それ  
でも私がなんとかやっていけているのは、私に  
は思いもよらない言動をすることがある彼  
らのことが興味深くて嫌いにはなれないし、  
ヒョウが好きだからです。

### 異文化のなかでの研究活動

マハレはタンザニアの中でもかなりの僻地  
で異文化を感じる機会が多いです。村には薬  
局がありますが、ちょっとした病気なら葉  
っぱを煎じて飲むこともあります。おなか  
が痛いときはハチミツにニンニクを入れて飲め  
ば治る、とも聞きました。

彼らは目に見えないものを信じます。呪術  
医がまだ活躍していて、ふつうの医者よりも  
格が上で治療代が高いそうです。また、精霊

## 10代とともに

を怒らせないように、と魔除けを持ち歩いたりもします。イスラム教徒が多いのですが、彼らは豚肉を食べないし、1か月の断食月のあいだは、日中は食事をとらず、水も飲みません。

マハレでは病気や事故での死が身近にあります。たまにワニやカバに人が襲われることもあり、ワニが川で洗濯中のお母さんを襲った、湖で子どもがワニに襲われた、などと聞きました。私はそういうことがこわくないわけではないですが、それでも「マハレに行きたい」「野生動物のことが知りたい」という気持ちのほうが勝ります。

### < Q & A >

#### Q) タンザニアでおいしい魚料理は？

小魚のスープや、野菜とともにヤシ油で炒めたおかず、または大きめの魚をシンプルに揚げて、野菜とともに炒めたものなどがよく

できますね。油や塩をたくさん使うためか、どれもとてもおいしいです。私たちが調理する際はだいたい和風のスープか唐揚げか刺身にします。

#### Q) いちばんよかったことは？

私がヒョウのフンからチンパンジーの骨を見つけたとき、新聞に掲載されるなど多方面で紹介されました。このことから、森林のヒョウは謎が多いぶん、だれも知らないおもしろいことがほかにもあるはずだ、と思いました。研究の成果を得るには時間がかかりますが、私しか知らないマハレのヒョウを、論文として世界中の人にむけて発信できたときに、「研究を続けていてよかった」と心から思いますね。

#### Q) 死が身近なタンザニアで怖い思いは？

私が乗っていた長距離バスで、ものすごい

ガタガタ道を運転手がとんでもないスピードで走らせたときは死ぬかと思いました。まわりの人も神に祈っていました。そのときは頭のなかでほんとうに走馬灯が見えました。

#### 10代のみなさんへのメッセージ

勉強や部活など、いましかできないことを思いきりやってほしいと思います。楽しいだけでなく、苦手なこともあるかもしれませんが、できそうなときは苦手なこともやっておくと、おとなになって助けになることもあると思います。私もたとえば小学生、中学生のときの経験はいい思い出ばかりではありませんし、鮮明に覚えていることばかりではないですが、どれもいまの自分の心の奥底で支えになっていると思います。いろいろな経験を積んで、将来の糧としてください。

(文責：編集部)

## インタビューを終えて

[取材協力] 神奈川県・静岡県のラボ・パーティ

長谷川智子P、林 恵子P (静岡県)、富山雅子P (神奈川県)

### 長谷川智子パーティ

●杉山幸歩 (高1) 今回のお話でヒョウのことや研究をしている現地での生活のことなどを知ることができておもしろかったです。いちばん印象的なのは子どもの頃から変わらない夢をもっておられたことです。私はそういうのがなく、夢中になりたいものが欲しい！とよく思っていました。すごいと感じると同時に強くうらやましく感じました。ヒョウの研究をし始めて4年間ヒョウに会えなかった、すごく死を身近に感じるといわれたのですが、その環境で研究を続けているのは「ヒョウが大好き」という気持ちが強いからだと思いました。今回私は自分の夢を見つけたいと再度強く思いました。話にも出ていたのですが、そのためにいましかできないさまざまなことを一生懸命に取り組みたいです。いつか自分がやりたいことが見つかった際その経験を生かして後悔のないようにしたいです。その一環として部活動、学校

生活、ラボ活動、とたいへんですが、時間を作って取りくみ、将来につながるような高校生活にしたいです。●佐藤香奈恵 (中3) 生物学者の仲澤伸子さんに話をうかがい、私は自分の好きなことを見つけて、諦めずに物事を探求し続けたいと思った。また、「好きなことだからしんどいときも耐えられる」と聞いて、「好き」をつくることがつらいときの支えになり、自分の心の土台をつくるのだと感じた。いまは具体的に好きなことやしたいことがないので、それらが何なのか見つけていきたい。

### 富山雅子パーティ

●杉山菜那 (大3) 私は動物に触れることが苦手ですが、とても新鮮な気持ちでお話を聞くことができました。自分の好きなことを仕事にするために、まったく知らない土地で、違う文化に飛びこんでいくのはとても勇気がいることだと思います。私もいま、好きなことを仕事にしようと日々励んでい

るので、とても勇気づけられました。長年研究されていても、まだ明らかにされていないことが多々あると思います。これからも現地で、日本で研究に励まれることを心から祈っています。●小金暖弥 (高2) アフリカの話はどれも新鮮で興味深かったです。テーマ活動でよく動物の役になることもあり、アフリカの動物の話はとても勉強になりました。幼い頃から夢を追いつづけるその思いを聞いて、自分もたくさんの時間をそそげる夢をみつけてみたいと思いました。●長部吹南 (中3) いろいろとお話を聞いて、全体的にとっても勇気や、やる気を得る機会になりました。小学生の頃はあまりラボキャンプが好きではなかったということに共感をしました。ラボキャンプが好きだからいい、ということではないけど、そんな人でも、将来自分の好きなことをとことんやり、人望のある人になっているという面でもとても勇気をもらいました。そして、小学生時代まではホームシックになってしまったりしていたけれど、好きなことをするためにアフリカに行ったときにそういう恐怖感などがなかったというのが、ラボの力なのかなと感じました。人によって夢は違うけれど、

その夢にむかってすなおにがんばろうと思いました。●高橋茉奈 (中1) 一途にヒョウや、ライオンのことを好きなのが感じられましたし、努力を重ねることによって夢が叶えられるんだなと思いました。

### 林 恵子パーティ

●稲垣 陽 (中3) おそらく自分では選ぶことのない道の専門家の貴重なお話を聞くことができてとても興味深かったです。ヒョウの柄で識別して頭数を数えたり、糞からふだんなに食べているのかというようなヒョウの生態のことはもちろん、現地でのキャンプでの日常生活の話や言語の話、死がつねに身近にあったり呪術がまだまだ広く伝わっていることなど日本で暮らしていると考えられないような環境のお話はテレビなどでもなかなか見られないので、今回参加できてよかったです。とくに国際交流のお話に関して、私は来年国際交流に参加しようと思っているので、英語がうまく話せなくてもコミュニケーションはとれることや、写真を通して交流の楽しそうなふんいきが伝わり、とても参考になりました。

[取材日] 2022年11月



# 地平線白書

ラボ国際交流 2022



2022年夏、コロナ禍によって3年ぶりとなったラボ国際交流プログラム。1年または2年も待ったうえでの参加者もいました。「見る」と「聞く」では大違い。「体験」と「知ってる」はもっと違います。参加者のみなさんは、人に出会い、ものに出会い、あざやかに感じ、さまざまなことを考えた夏となりました。では、5名の参加者に体験レポートをしていただきましょう。



## ことばのキャッチボール

てら おゆず き  
寺尾 柚生

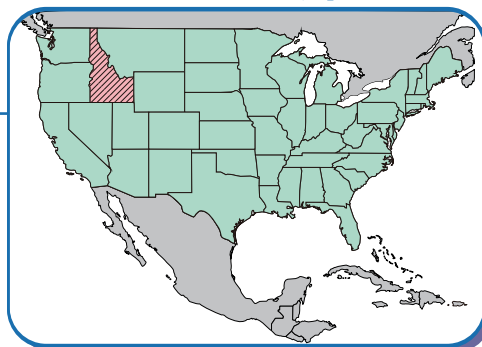
(高1 / 兵庫県・福田智美P)

■日程 7月22日～8月17日



ホームステイに出発する前は英語についての不安がありました。この不安を友だちに相談すると「楽しまんと損！めったにできない経験なんだから！」といわれ、不安が少し軽くなりました。ホストファミリーに会ってからは少しずつこの不安はなくなっていきました。それは、ホストがぼくに対してむずかしいことばをわかりやすく説明してくれて、「Like...」と具体例をたくさん出してくれたおかげだと思います。

## アイダホ州



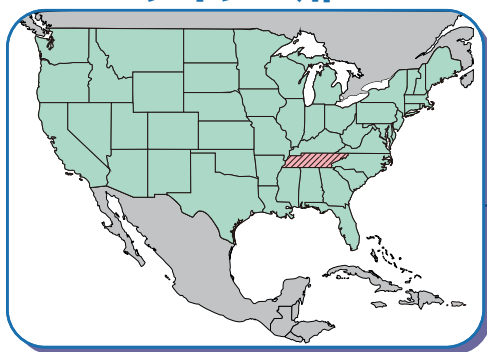
ことばへの不安はだんだんなくなっていました。自分に腹が立つことが多くありました。ホストとホストファミリーがぼくに質問をしてくれて、それに答えるだけで会話が終わってしまうことがたくさんあり、「もっとことばのキャッチボールがしたい」と思いました。しかしすぐにことばや文が思い浮かばず会話が続かない。とても悔しいことでした。

この国際交流をきっかけに「もっともっと英語を勉強したい！」と思うようになりました。そしてホストやホストファミリーにもっと自分のことが伝えられるようになり、何回もことばのキャッチボールができるように、ラボ活動や学校の勉強をしたいと思います。

ホームステイはほんとうに楽しくて、異文化だからこそできる貴重な体験や、異文化だけど日本と同じものがあり、たくさんの楽しい思い出ができました。



## テネシー州



## ふたつの目標

このほのか  
光野穂乃花

(中3 / 茨城県・松岡恵子P)

■日程 7月23日～8月18日

私はアメリカに旅立つ前、ふたつの目標を立てていました。それは Smile と Try です。そしてアメリカで生活するなかでこのたいせつさを痛感しました。

ホームステイが始まってすぐ、私は教会へ行きました。まわりは知らない人ばかり。緊張していましたが、笑顔でいようと決め、教会の扉を開きました。するとみんなが笑顔で話しかけてくれたのです。自分自身が笑顔でいれば、みんなが笑顔を返してくれたり、話しかけてくれたりすることに気づきました。とくにうれしかったのは、お別れのときにたくさんの人に、"Your smile is beautiful." "I love your smile." といわれたこと。笑顔をとおして心と心が通じあえた気がしました。

Try これはふだんの私とはほど遠いことばでしたが、ステイ中は何にでも挑戦すると決めていました。

ホストファミリーたちはよく私に "Do you wanna try?" と聞いてくれて、そのたびに "Yes!" と答えたことで、たくさん貴重な経験ができました。たとえば、ホストが友だちと話しているとき、私も会話に加わったら、その友だちともなかよくなれました。ただ、うまくいくことだけではありません。高校にホストと通ったとき、英語のテストに挑戦しましたが、むずかしい長文を理解できず、さびしい思いをしました。でも、いま思うとこれも貴重な体験でした。結果に関わらず、Try すれば経験値になると感じました。

人と人が会えるときには、Smile と Try がたいせつなのだと私は学びました。



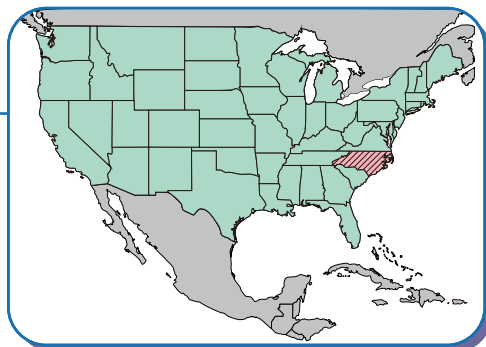
## 必要なのは勇気だけ

こ だいしょう た  
小平祥太

(高1 / 神奈川県・壺井節子P)

■日程 7月22日～8月17日

## ノースカロライナ州



私は今回の国際交流にはあまり前向きではありませんでした。父や姉はホームステイの経験があり、私も行くことがあたりまえのように感じていました。でも私は行きの飛行機で考えました。私は英語が苦手で避けてきました。そんな自分がいやでいつか克服したいと思っていました。そこで今回はホームステイで英語への意識をあらためよう、相手とたくさん話し、自分の意見があるときは遠慮なく伝えようと誓いました。



ぶじに到着し、ホストファミリーと対面しました。自分でも笑ってしまいたくなるほどうまく話せず、3日間ほどひじょうにつらい日々が続きました。自分は必死に伝えようとしたが、どうすればいいのかわからなくなってしまいました。

しかしホームステイ開始から4日目、はじめてホストに自分から遊びに誘ってみました。恐る恐るだったのですが、彼はやさしく対応してくれ、うちとけることができました。そこから先は流れるように時間が過ぎて、ほんとうに一瞬のように感じられました。自分から発することがこんなにむずかしいことだとは思いませんでした。でもそこに必要なのは「勇気」だけなのだと気づかされました。気づけた自分をほめたいですし、気づかせてくれたホストに感謝しています。



## またシャペロンとして帰っておいで

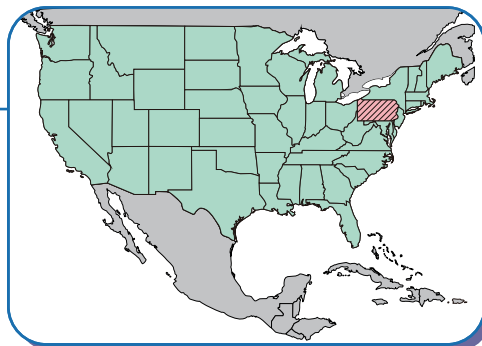
かみ お だ な な み

**上小田七海**

(中3 / 広島県・上小田郁子P)

■日程 7月23日～8月18日

## ペンシルバニア州



私が熱を出してしまったときにホスト Mom が看病してくれて、ホストや姉妹がときどきようすを見にきてくれました。「いちおうコロナの検査をすることになった」と Mom にいったとき、「私たちはコロナなんてこわくないわ」とハグしてくれました（結果は陰性でした）。なかなか体調が回復せず、友だち家族とピクニックに行くよ、といわれた日の朝、お見舞いに来てくれた友だち家族がアルバムとメッセージをくれました。うれしくて元気が出ました。またこのステイではとても異文化を感じました。アメリカではパンや野菜だけでなくベーコンも手づかみだったり、ニンジンを生で食べたり、お皿を持ちあげなかったりと、マナーや食べ方が違ったり、虫もふつうにいたのには慣れました。

日本食を作ったとき、はじめに作ったそうめんはホストにあまり気にいってもらえなくて悲しかったけど、2回目に作ったお好み焼きはみんなに気にいってもらえたみたいで、とてもうれしかったです。壁にあるボードに1週間の夕食メニューが書いてあって、私が作る日は“Nanami's Japanese meal”と書いてあったり、いつも仕事でいないホスト Dad とホスト Brother もその日は帰ってきてくれたりしてうれしかったです。

最後の日に私が「帰りたくない、ずっとここにいたい」と言っていたら、ホスト Mom が「またシャペロンとしてうちに帰っておいで」と言ってくれたのでぜったいに帰りたいです。





## もっと自然を知りたい、もっと英語で話したい

ふなこし

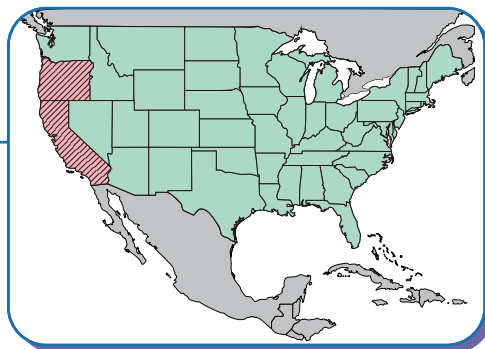
舟越あすか

(高1 / 埼玉県・舟越千賀子P)

■日程 7月24日～8月15日

■訪問先 オレゴン州、カリフォルニア州

### オレゴン国際キャンプ

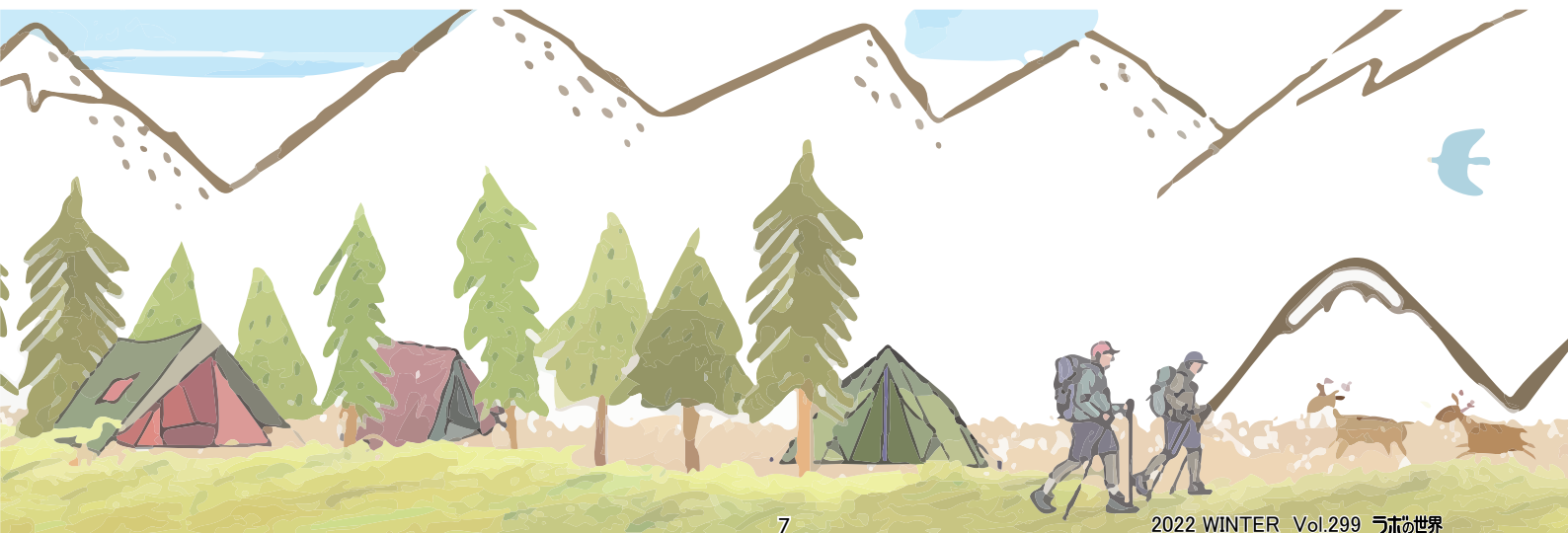


出発前は初めての海外で英語も通じるかわからないということもあり、とても緊張していました。けれど2、3日たつと楽しめるようになりました。アンバサダー（現地参加者）や主催団体の OMSI の人たち（運営スタッフ）と話すことも増え、日本のアニメや漫画の話をして盛りあがりました。いっしょにビーチで遊んだり、折り紙を折ったりもしました。日本食をふるまった日にはみんな「おいしい！」と喜んでくれてとてもうれしかったです。

いままでこんなに自然のなかで長い時間過ごしたことがなかったので、行くところすべてが新鮮でおもしろかったです。OMSI の人たちが自然についてくわしく教えてくれたので興味がわきました。とくに何千何百万年前の化石や地層を「いま」見ることができていることがすごいと思い、もっと知りたいとも思いました。

このキャンプはほんとうにたくさんの楽しい経験ができて、自分が成長するためにたいせつなことも教えてくれました。このキャンプでことばが通じることのうれしさ、すごさを知ることができました。けれどももっと自分からなにかできたのでは、とも思うので、感じたことすべてをこれからの生活につなげていきたいと思います。できるならもう一度、英語をもっと理解して話せるようになってからアンバサダーや OMSI の人たちと会いたいです。

ほんとうに忘れられない思い出になりました。とにかくすごく楽しくて、幸せな3週間でした。





# 「ことばって、こう考えてみたら めっちゃおもしろいなあ、 先生」

10/30  
(日)

教師のための  
ことばセミナー 2022 年

第2講

東京言語研究所では毎年、ことばの教育に関心がある人にむけた、「ことばへの気づき」を利用した実践とその理論背景を紹介するセミナーを実施しています。

第2講は、小学校の現役の教員である北野ゆき氏をお迎えし、小学校の外国語活動のなかでのことばへの気づきを利用した授業実践についてをお話いただきました。



大阪府守口市立錦小学校教諭。現在5年生担任。ホテル勤務、専業主婦を経て現職。昨年度までは小中一貫の義務教育学校勤務。

著書に『ワクワクする小学校授業の作り方』（共著／大修館書店）『“先生”のための小学校英語の知恵袋—現場の『？』に困らないために—』（共著／くろしお出版）がある。

## ことばセミナースケジュール

10/16 (日)

ことばへの気づき  
と小中高大校種別  
対応可能性

大津由紀雄  
・関西大学

10/30 (日)

ことばへの気づき  
を利用した小学校  
での授業実践

北野ゆき  
・守口市立  
錦小学校

11/20 (日)

ことばへの気づき  
を利用した大学で  
の授業実践

向後朋美  
・十文字学園  
女子大学

12/4 (日)

ことばへの気づき  
を利用した国語科  
と英語科の連携

柁木貴之  
・北海学園大学

12/18 (日)

学校教育の視点か  
ら見た、ことばへ  
の気づき

巨理陽一  
・中京大学

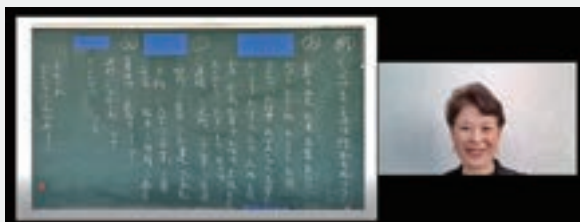
## 今回

小学生はいろいろな教科を行ったり来たり、知っていることと新しく知ることのあいだを行ったり来たり、自分の考えと人の考えを行ったり来たりしながら、最後は学んだことをもう一度自分のことばにすることで「あたりまえ」とスルーしていたことが、じつはあたりまえではなかったということに気づいていきます。それが学びを深めていきます。

小学校の外国語学習でも同じです。外国語の授業で母語（日本語）を外から見てみる体験をすることで、母語（日本語）の理解をより深めることができるのです。そして「ことばっ



小学校での授業風景



ておもしろいなあ」と感じ、ことばへの感度を高め、ことばをだいにする態度が養われるのです。それが生涯にわたって外国語学習を続ける力になるのではないかと思います。

子どもたちが「だから英語をカタカナにしてもしょうずに表せなかったのか」「（ローマ字学習を通して）日本語の発音を知った」「文字には歴史がかくされている」「変わっている文字を調べていったけれど、じつは変わっている文字なんてない。日本語だって外国から見たら変わっている文字って思われているのかもしれない」「ぼくはいままで外国語を学んできて、英語はとてもおもしろいと思いました。でも今日、日本語はとてもおもしろいと思いました」と

いうふり返りを書いたこと、アルファベットとの出会い、ローマ字からの気づき、多言語をつかったの学び、文字プロジェクトなどを紹介しました。

## 多言語をつかったの学びのワークシート

それぞれの国のことばを聴いてカタカナで書いてみると、人によって違いが出ます。

| 言語     | 自分でやった書き写し | 本物の文字 |
|--------|------------|-------|
| フランス語  |            |       |
| 朝鮮語    |            |       |
| ドイツ語   |            |       |
| ポルトガル語 |            |       |
| 中国語    |            |       |
| ベトナム語  |            |       |
| タイ語    |            |       |
| 英語     |            |       |
| 日本語    |            |       |

| 本物の文字                           |
|---------------------------------|
| Three apples, please.           |
| กรุณาสามแอปเปิ้ล                |
| Trois pommes, s'il vous plait.  |
| Três maçãs por favor.           |
| Xin hãy bán cho tôi ba quả táo. |
| 사과 3 개주세요                       |
| りんご3個ください。                      |
| Drei Äpfel, bitte.              |
| 請給三個蘋果                          |



**木村恵美**  
小学校教員

## 人との出会いから学びつつける

私がラボ活動を始めたのは3歳の頃でした。気づいてみれば、にぎやかなパーティの仲間に囲まれて過ごす時間が日常にありました。また、両親は積極的に外国からのホームステイの受入れをしていたので、ベジタリアンのフランスの家族、インドの女の子、アルゼンチンの船乗りさん、日本文化に関心のあるオーストラリアの女の子……と、小学生の頃からいろいろな国籍の人たちと生活を共にすることが多くありました。そして中学2年生の夏、いよいよ自分がラボ国際交流のホームステイに参加することになりました。

始まってみると、なかなか英語でのコミュニケーションがうまく取れません。私のホストが家族や友人と楽しそうに会話したり遊んだりして



ホストと浴衣でおそらい

いる場面ではさびしく感じるときもありました。

そんな私に、ホストは“Megumi, Try!”とか“Smile!”と明るく声をかけてくれました。引っこみ思案な部分もあった私が「なにもしないままではいけない。自分の気持ちを表情や行動ですすんで表してみよう」と思えた瞬間でした。

それから時間がたって大学生になりました。今度はラボ国際交流に参加する子たちのサポートをしたいなと思い、ラボの大学生活動ではカレッジメイト活動を選択しました。大学2回生で、立場は変わって引率者として、2度目のホームステイをしたのです。

ホームステイ期間中にある参加者がステイしていたホストファミリーから、「うちに来た子に元気がない。なにも話してくれなくて心配だ。どうしたらいいだろうか」との相談がありました。さっそくその子の思いを聞いてみると、ことばがわからないことへの不安や日本との生活の違いによるつらさなどを話してくれま

した。私は自分の中学生の頃のことを思いだし、「まずは smile だよ!」と伝えました。しばらくしてホームステイ期間の途中の交流会で出会ったその子は、笑顔でホストと並んでいました。なんだか人が成長した瞬間に立ち会ったようで、うれしかったです。

ラボ・パーティでの縦割り（異年齢）での活動の楽しさ、人が成長する場面に出会えた喜びを経験し、「教育に携わる仕事がしたい」と強く思うようになり、教師になる道を選びました。

ラボの活動を続けていたからこそ得られたたくさんの人たちとの出会いが自分を導いてくれたのだと感じています。これからも、人との出会いをたいせつにしながら、人との出会いから学びつつけられる人でありたいと思います。

きむら めぐみ＝小学校教員（滋賀県内公立小学校）  
（滋賀県・川嶋淳子パーティ OG）

